

る。

ただし、例外も、わずかながらある。それは、次の(67)(68)などに見られる「柔らげ」の「モ」と「柔らげ」の「ナド」と名づけられるものである。

(67) 春ⁿモタケナワニナッテキマシタ。

(68) 妹ⁿナド(モ)ヨク、アナタノオウワサヲシテイマス。

(67)や(68)のような「モ」や「ナド」は、他者が不定であって、とりたて詞の中でも特殊なものである。詳しくはいずれ改めて述べることにして、本稿では、こうした例外のあることを指摘するにとどめる。

5. まとめ

本稿では、とりたて詞の意味に関する4組の基本的概念のうちの、「自者」と「他者」について考えた。

そして、

1. 自者はとりたて詞にとりたてられる単文中の要素であり、他者はそれに対比されるものであること、
 2. 自者には、名詞句、副詞句、述語句などの場合や、テンスの場合もあること、
 3. 自者と他者の間には、構文論的、意味的な何らかの同類性があること、
 4. 他者は、言語的、非言語的文脈から、何らかの形で理解されること、
- などを述べた。

付記 本稿は、昭和59年度都立大学国語国文学会での研究発表の内容に、若干の修正を加えたものである。発表の折、御出席の方々に、多くの貴重な御指摘を戴いた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- 奥津敬一郎1974 『生成日本文法論』大修館
———1975 「形式副詞論序説——「タメ」を中心として——」『人文学報』第104号、東京都立大学人文学部編
———1983 「統・形式副詞論——目的・理由の形式副詞——」『現代方言学の課題——第1巻社会的研究篇——』明治書院
久野諱1973 『日本文法研究』大修館
———1983 『新日本文法研究』大修館
高橋太郎1978 「「も」によるとりたて形の記述的研究」『国立国語研究所報告62』国立国語研究所
寺村秀夫1981 「ムードの形式と意味(3)——取立て助詞について——」『文藝言語研究言語篇』6
沼田善子1984 a 「とりたて詞の研究」東京都立大学
———1984 b 「とりたて詞の意味と文法——モ・ダケ・サエを例として——」『日本語学』Vol. 3 No. 4 明治書院
橋本進吉1969 『橋本進吉博士著作集第8冊助詞・助動詞の研究』岩波書店
松下大三郎1977 『増補校訂標準日本口語法』勉誠社
宮田幸一1948 『日本語文法の輪郭』三省堂
森田良行1972 「「だけ・ばかり」の用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』10号
山田孝雄1908 『日本文法論』宝文館書店
———1936 『日本文法学概論』宝文館書店
Kageyama T 1973 "On the Generation of Japanese Mo" PIJL Vol 2:2

(東京都立大学大学院学生)

山口県長門方言の音韻

藤田勝良

1. はじめに

本稿では山口県北部の長門方言をとりあげ、老年層の音韻体系を1980, 1981, 1983年の臨地調査にもとづいて記述する。調査地点は稲作を主な産業とする山あいの農業集落長門市洪水地区である。山口県方言の音現象については岡山方言、広島方言などの中国諸方

言とともにai連母音の相互同化現象や前接する名詞・動詞と助詞・助動詞の融合現象が特色の一つとしてあげられるが、長門中央域はとりわけ相互同化現象の顕著な地域として指摘されてきた。(藤原1977, 中川1982参照)しかし、県下の、このような音現象によって生じる音声は、従来、音韻解釈においては元に戻され

bi	be	bæ	ba	bo	bu	—	—	bja	bjo	bju	—	—	—
pi	pe	pæ	pa	po	pu	—	—	pja	pjo	pju	—	—	—
fi	—	—	fa	—	fu	—	—	—	—	—	—	—	—
N Q R													

3. 母音音楽

当方言には、/i, e, æ, a, o, u/の6個の母音音素が認められる。前舌母音/æ/の認められる点が特徴的である。無声子音に挟まれた狭母音の無声化現象は当方言にはみられない。ただし、若年層では時に [ʃita] (下)のように無声化のみられることもある。以下各母音についてのべる。

3.1. /i/ [i]

東京語の/i/にはほぼ一致する。ただ、渋木地区では聞かれないが日本海に面する仙崎地区では、中舌的な音の聞かれることもある。例えば次のとおりである。

/kazikeru/ [kadzikeru] (かじかむ)
/haziku/ [hadziku] (はじく)

日本諸方言をみると一般に/i/に前接する子音には口蓋化が認められるが、当方言ではui連母音の融合現象、及び末尾拍/zu/の名詞と助詞ニの融合現象によって生じた/i/の前のs, z, c子音は口蓋化を起さない。例えば、次の[madzi:] (まずい)は[madzi:]とはならない。後述するようにこの口蓋化の有無が互いの弁別の特徴となっている子音の組のみられることも注目される点である。/i/の用例は次の通り。

/hizji/ [çidzi] (肘), /kisji/ [kifi] (岸)
/micji/ [mitfi] (道), /nigar/ [niga:] (苦い)
/pimpira/ [pimpira] (御転婆), /kuri/ [kuri] (栗)
/biri/ [biri] (泣き虫), /giri/ [giri] (つむじ)
/usir/ [usi:] (薄い), /mazir/ [madzi:] (まずい)
/acir/ [atsi:] (厚い)
/nokokuzir/ [nokokudzi:] (鋸屑へ)

3.2. /e/ [e]

東京語の/e/にはほぼ一致するが、次のように狭い発音の聞かれることもある。

[arukɛ:] (あるから), [ɛki] (支谷)
[darɛ: kitemo] (誰に聞いても)
[okafɛ:tomesan] (どうもおかしいよ)
[ɛ:koro no:deno:] (ずいぶんと飲むだけ飲んでね)
[koamɛdʒattara] (小雨だったら)

精密表記では狭母音化を示す記号を付けるべきであるが、以下ではこのような発音も含めて[e]で代表さ

せて表記する。このようなeの狭母音化は長門市の日本海側でより顕著である。なお、/e/に解釈される音声にはoi, oe連母音の融合によるものもあり、その場合には必ず次に/R/を伴う。/e/ [e]の用例は次の通り。

/hebi/ [hebi] (蛇), /kogeru/ [kogeru] (焦げる)
/kere/ [kere] (蹴ろ)
/ko'icɛr/ [koitse:] (こいつに)
/zerkin/ [ze:kin] (税金)
/serta/ [se:ta] (急いだ)
/hane/ [hane] (羽), /deru/ [deru] (出る)
/te/ [te] (手), /mesji/ [meʃi] (飯)
/bero/ [bero] (舌), /teqpen/ [teppen] (頂上)

3.3. /æ/ [æ]

/æ/はaiまたはae連母音の融合によるものであり、必ず次に/R/を伴う。ただし、ai, ae連母音の融合については2.1.2を参照。/æ/を認定するのは、融合において調音点が一点であること、また、先に示した[hænæ:ru] (始める)や次に示す①の例のようにいくら丁寧な発音でも連母音の形に戻すことのできない例のみられること、および②のような/e/, /a/との音韻論的な対立を示すと考える例をあげることができることによる。

- ① /konærdɑ/ [konæ:da] (このあいだくこの前)
/kærsa/ [kæ:sa] (わずか)
/kimæR/ [kimæ:] (気がまえ)
- ② /gæR/ [gæ:] (害): /ger/ [ge:] (芸)
/hanæR/ [hanæ:] (はなに<先に>): /haner/ [hane:] (羽に, 羽へ): /hanar/ [hana:] (はなは, はなを<先は, 先を>)
/sæRta/ [sæ:ta] (裂いた): /serta/ [se:ta] (せいた<急いだ>)
/kasæR/ [kasæ:] (笠へ): /kasar/ [kasa:] (笠は)
- 上記の外に/æ/ [æ]の例を示せば次の通り。
/jæRta/ [jæ:ta] (焼いた)
/sji'wæR/ [ʃiwæ:] (しわい<肉などが繊維質でなかなかみきれない様子の形容>)
/sæRSæR/ [sæ:sæ:] (再々<しばしば>)
/zæRgo/ [zæ:go] (ざいご<田舎>)

ることが一般的であった。これは連母音の相互同化現象についていえば、記述された地点において、1) その音価が必ずしも [æ] として安定したものではなくむしろ [ai] [ae] のような発音の方が一般的であること、2) 丁寧に発音した場合には融合しない形があらわれという事情によるものであるとおもわれる。

しかし、浜木地区においては、1) についていえば日常自然な発話では [sæ:ta] (裂いた), [hæ:] (灰) として音価の安定し、しかも次のように音韻的な対立と考^(注2)えうる例を呈示することのできるものがある。

[sæ:ta] (裂いた) / [se:ta] (急いだ), [hæ:] (灰) / [he:] (塀) / [ha:] (葉)

また2) についていえば、共通語の波が大きくかぶさっている現状ではむしろ場面を絞る必要があるのではないかと思われる。一概にはいえないが、場面に応じて共通語と方言のとりのかえの行なわれる可能性もあるのである。また、たとえそのようなとりのかえが関与していないとしても浜木地区では [hanæ:ru] (始める) [tæ:gatae:] (有り難い) のようにいくら丁寧に発音でも [hanairu], [taegatai] と相互同化しない形にすることのできない例が観察される。またその発音に際してはいわゆる二重母音のように調音点の移動はなく、調音位置は一定している。

一方、助詞、助動詞の融合現象については県下ほとんどの地域の日常生活で安定的に存在しているとみられるから主として2) の理由によるものと思われるが、やはり場面を絞るべきではないかと思^(注4)われる。

このような観点から本稿では、相互同化や融合現象によって生じる音声のうち日常生活場面において安定度の高いものについてはその音声にできるだけ沿う形で音韻解釈を行なっていきたい。

(表記について) g は軟口蓋破裂音を示す。

'i	'e	'æ	'a	'o	'u	—	'jæ	'ja	jo	'ju	'wæ	'wa	'wja
hi	he	hæ	ha	ho	—	—	—	hja	hjo	hju	—	—	—
gi	ge	gæ	ga	go	gu	—	—	gja	gjo	gju	—	—	—
ki	ke	kæ	ka	ko	ku	—	—	kja	kjo	kju	—	—	—
ci	ce	—	ca	co	cu	cji	—	cja	cjo	cju	—	—	—
zi	ze	zæ	za	zo	zu	zji	—	zja	zjo	zju	—	—	—
si	se	sæ	sa	so	su	sji	—	sja	sjo	sju	—	—	—
ri	re	ræ	ra	ro	ru	—	—	rja	rjo	rju	—	—	—
ni	ne	næ	na	no	nu	—	—	nja	njo	nju	—	—	—
—	de	dæ	da	do	—	—	—	dja	djo	—	—	—	—
—	te	tæ	ta	to	—	—	—	tja	tjo	—	—	—	—
mi	me	mæ	ma	mo	mu	—	—	mja	mjo	mju	—	—	—

2. 音素

これまでの調査の結果、当方言には次の4種26個の音素が認められる。

母音音素 /i, e, æ, a, o, u/

半母音音素 /j, w/

子音音素 / ; h, g, k, c, z, s, r, t, d, n, m, b, p, f/

拍音素 /N, Q, R/

これらの音素を東京語と比較すると母音音素/æ/子音音素/f/を有すること、子音音素/ŋ/を欠いている点に特色がある。これらの音素は単独に、または一定の規則に従って結合して拍をつくる。当方言における拍の型は次の6種である。

CV, CSV, CSSV, N, Q, R

これを共通語と比較すれば/CSSV/の特異な拍を有することが特色としてあげられる。この拍構造は[arawja:] (洗えば) のように動詞の假定形と助詞が接続する場合、あるいは[utawja: se:] (歌いはしない) のような強調の否定表現に於いて生ずるものである。従来このような形態音韻論レベルでも問題となるとみられる音声を積極的に拍構造にとりこまない記述があったが、これは音声実態から離れた記述のしかたであると考えられる。ただ当該の拍についていえば、当方言に[kwa], [gwa] のような合幼音が認められないことから/w/を子音に準じて子音軸の1つとして処理し拍構造をCSVとすることも考えられなくはない。しかし、/w/の発音に際してその前にみられるゆるやかな声立ては/i/, /e/, /æ/, /a/, /o/, /u/, /j/と共通しているし、また当方言の/w/は摩擦的要素は弱く子音性は乏しいといわざるを得ないから、やはり/w/は半母音として母音の軸に据え、CSSVの拍構造を認める方がより妥当であると考えられる。次に当方言の拍体系を示す。

/suræR/ [suræ:] (すらい くすばやく 抜けめがない
様の形容)

3.4. /a/ [a] ~ [a]

東京語の/a/に比べやや後よりである。アクセントのおかれかたにより調音点の変動がみられ、一般的にアクセントの低い拍では[a], 高い拍では[a]に近く実現する傾向が認められる。例えば次の通り。

[aʃi] (足); [ame] (雨)

ただし以下では簡略的に[a]で記述する。/a/の用例を示せば次の通り。

/nangi/ [nappi] (難儀)

/'udarago/ [udarago] (赤児)

/'iga/ [iga] (喉にささった魚の小骨)

/mi'jasir/ [mijasi:] (容易な)

3.5. /o/ [o]

共通語の/o/にほぼ一致する。/o/の用例を示せば次の通り。

/honto/ [honto] (雨戸), /gotæR/ [gotæ:] (体)

/'enko/ [enکو] (河童)

/ko'icor/ [koitso:] (こいつを)

/sorke/ [so:ke] (ざる)

/noru/ [noru] (背伸びをする)

/dorsjin/ [do:ʃin] (仲間, 道連れ)

/tokurcɔru/ [toku:tʃoru] (懇意にしている)

3.6. /u/ [u]

母音uは円唇である。これは若年層も変らない。調音位置は共通語に比べやや後寄りである。/u/の用例を示せば次の通り。

/'igaku/ [igaku] (ゆがく)

/nurir/ [nuri:] (ぬるい)

/nubu/ [nubu] (伸びる)

/sukumo/ [sukumo] (糶殻)

/kaburu/ [kaburu] (人や犬などの動物が肉質のものを歯で噛むこと, または蚊が肌を刺す動作)

4. 連母音の融合

当方言においてはaiとaeの連母音が融合する他, oiとuiの連母音にも融合化がみられる。この場合もやはり融合音は長音となる。まず, oiとoeの連母音の融合についていえば, これは次に示すように[e:]として発音される。

oi > e /hirer/ [ɕire:] (広い)

/kurer/ [kure:] (黒い)

/omosjirer/ [omofire:] (面白い)

/oser/ [ose:] (遅い)

/kasjiker/ [kafike:] (賢い)

oe > e /soker/ [soke:] (そこへ)

/sjimer/ [ʃime:] (下へ)

/noder/ [node:] (喉へ)

/doker/ [doke:] (どこへ)

注: oiの融合のうち, -Voi-の型の融合の場合は[ja we:]や[sa we:](竿へ)のように弱いw音の前に伴うことがある。これには, oがもともと弱いw音を伴っている場合も, そうでない場合もある。ただし, この融合は上に示したようにoiでは形容詞語末, oeでは名詞と格助詞eの承接において顕著であり, その他の場合には融合しないことが多い。たとえば次の通り。

/to'i/ [toi] (樋), /hi'o'i/ [çoi] (日覆)

/'o'inoko/ [oinoko] (物を背負って運ぶための木の台), /ko'eru/ [koeru] (越える)

/mo'eru/ [moeru] (燃える)

/ko'e/ [koe] (声)

また, 形容詞語末にあっても次の諸例では融合せずに[i]が長音になる。

/to'ir/ [toi:] (遠い), /o'ir/ [oi:] (多い)

/ko'ir/ [koi:] (濃い)

なお, この融合において, 時に[e:]とならず[ø:]と発音されることもあるが, 安定的ではない。日常の発話場面で比較的[ø:]の発音のよく聞かれる[taø:](峠[tao]へ)のような例についても[taø]との間でゆれている状態である。このため, これを1個の音素としては認めがたい。

次にui連母音についていえば, これは次に示すように, 多く[i]として発音される。

ui > i /warir/ [wari:] (悪い)

/furir/ [furi:] (古い)

/sabir/ [sabi:] (寒い)

/nurir/ [nuri:] (ぬるい)

/sjinrir/ [ʃinri:] (親類)

/'otocir/ [ototsi:] (一昨日)

/nukir/ [nuki:] (暖かい)

/ka'ir/ [kai:] (痒い)

ただし, この融合も形容詞語末, 特定の名詞において顕著であり, その他の場合には融合しないことが多い。たとえば次の通り。

/mu'ika/ [muika] (六日), /ku'i/ [kui] (杭)

/su'ita/ [sui̯ta] (すいた)

/cu'ita/ [tsui̯ta] (付いた)

/nu'ita/ [nui̯ta] (抜いた)

最後に ai と ae の連母音についていえば、これは3.で述べたように多く [æ:] として発音され、しかも oi, oe, ui 連母音と違ってほとんど品詞、位置を問わない。ただし、次のように形容詞語末、助動詞「たい」では、次のように [a:] と発音されることもあり、助動詞「まい」ではむしろ [a:] が一般的である。形容詞語末、助動詞「たい」の [a:] 音は男性を中心に聞かれるが、[æ:] ほど優勢ではない。また [æ:] に比べてぞんざいな感じを伴う。

/kumar/ [kuma:] (来まい)

/hurumarde/ [Furuma:de] (降らないだろうよ)

/kurar/ [kura:] (暗い), /akar/ [aka:] (赤い)

/'ikitar/ [ikita:] (行きたい)

/mitar/ [mita:] (見たい)

また、[e:] と発音されることもあるが、これは劣勢である。

/ipper/ [ippe:] (一盃)

5. 半母音音素

半母音音素は、当方言においては /j/, /w/ の二つが認められる。/w/ については既に述べたように拍の構造を考えれば子音としての解釈も成立するが、その音声実質についてみれば摩擦的要素を伴う子音的な性格のものではないことからやはり半母音として記述すべきであると考えられる。以下それぞれについて述べる。

5.1. /j/ [j]

半母音音素 /j/ の構成する拍には東京語に認められる /Cja/, /Cjo/, /Cju/ の拍の他、/CSja/ (Cは/'/, Sは/w/)、/Cjæ/ (Cは/'/), /Cji/がある。それぞれについて具体例を上げればつぎの通りである。

/Cji/ /micji/ [mitʃi] (道) /kucji/ [kutʃi] (口)

/Cjæ/ /jæerto/ [jæ:to] (灸)

/hi'jæR/ [çijæ:] (冷たい)

/Cja/ /kurjar/ [kurja:] (来れば)

/injar/ [ina:] (住ねばく帰れば)

/Cjo/ /kjordæR/ [kjo:dæ:] (兄弟)

/gjorgi/ [gjo:gi] (行儀)

/Cju/ /mjur/ [mjur] (見よう)

/kjur/ [kju:] (木を)

/CSja/ /ara'wjar/ [arawja:] (洗えば)

/saso'wjar/ [sasowja:] (誘えば)

/Cji/ の具体例は共通語では /ci/ と解釈されるが、当方言においては [tʃi] が次のように安定してあらわれる語例の多いことから、サ行と平行的に [tʃi] は /cji/ と解釈し、[tʃi] を /ci/ と解釈する。次の語例において [tʃi] が [tʃi] と発音されることはない。

[atsi:] (暑い) [tsi:na] (同じの)

[natsi:tforu] (なついている) [katsi:de] (担いで)

/CSja/ の拍は前述したように構造的には CSSV の特異な拍構造であり、当方言の特徴的な拍である。この拍はいわゆるハ行動詞の仮定形および「～しはしない」の形の強調形に実現する。

/ha'wjar/ [hawja:] (這えば)

/su'wjar/ [suwja:] (吸えば)

/kira'wjar/ [kirawja:] (嫌えば)

/nu'wjar/ [nuwja:] (縫えば)

/Furu'wjar/ [Furuwja:] (ふるえば)

/kako'wjar/ [kakowja:] (囲えば)

/'uta'wjar sen/ [utawja: sen] (歌いはしない)

/mora'wjar sen/ [morawja: sen] (もらいはしない)

注：ただし、強調形の場合には /wja/ と /ja/ の交替が顕著である。

こうした CSSV の拍構造は鏡味1976によれば島根県松江方言にも、また神部1978によれば隠岐方言にも同様な形で認められる。鏡味1976ではカワー(買えば)、神部1978では [hawja] (這えば), [arawja] (洗えば) のような例があげられている。このような例については神部1978で指摘するようにハ行転呼現象で生じた [w] 音との関係が考えられよう。

なお、CSSV の拍構造はこの他に連母音 ai の融合現象によって佐賀県北山方言(九州方言学会編1969)、静岡方言の一部(中条編1982)にも認められるとのことであり、また特殊な成立事情によるが八丈方言にも認められるとの報告記述(馬瀬1961)がある。

5.2. /w/ [w]

半母音音素 /w/ は /j/ で述べた拍の他、/Cwa//Cwæ/ (Cは/'/) の拍を構成する。このうち /Cwæ/ はやはり連母音の融合現象によって生じる拍である。たとえば次の通りである。

/sji'wæR/ [ʃiwæ:] (肉などが繊維質でなかなか噛みきれない様), /'wæRta/ [wæ:ta] (沸いた)

なお、長門市内海岸部では w 音の脱落が著しく仙崎地区では「若い」が [akæ:], 「分からない」が [akara:] のように発音されるが当地区ではこのような現象は顕

著ではない。ただし、後述するように助詞ハと前接名詞との融合現象においてはw音の脱落が認められる。

6. 子音音素

子音音素は、前述したように音素自体については鼻音音素 /ŋ/ を有しないこと、両唇摩擦の子音音素 /F/ が認められる点に特徴がみられる。/F/ は、連母音の融合現象、名詞と助詞の融合現象によって、次のように /fi/ /fa/ /fu/ という拍の構成要素となり、またこうした現象によらず /fu/ という拍の構成要素となる。

/hɔrɸiɾ/ [ho:fi:] (防府へ)

/ɸiɾta/ [ɸi:ta] (拭いた)

/ɸuɾiɾɸaɾ/ [ɸu:ɸa:] (古いのは)

/sæɾɸaɾ/ [sæ:ɸa:] (財布は)

/toɾɸu/ [to:ɸu] (豆腐)

注1：当方言には準体助詞としてホ[hɔ], ソ[sɔ]の二種類があり、ともに日常頻繁に用いられている。上記の[ɸu:ɸa:]の[ɸa:]は準体助詞ホに係助詞ハの融合した形である。

注2：ただし、これらは中若年ではいずれも安定的ではなく非融合形で発音されることが多い。たとえば、「防府へ」は[hɔ:ɸue], 「古いのは」は[ɸu:ɸowa]あるいは[ɸu:ɸowa]のように発音されることが多い。

一方、それぞれの子音音素が構成要素となる拍にも東京語にみられない拍がある。このうちほとんどの拍に共通しているのは子音音素が /æ/ と結びつくことによるもので、/c/ /F/ 以外のすべての子音がこれにより構成要素となる拍を一つ増やしている。ただし、/æ/ に前接することで子音に特別な変化は生じない。そこでこれらについてはここで具体例を上げ以下の記述では省略する。

/'æ/ : /'ærsacu/ [æ:satsu] (挨拶)

/hæ/ : /hæɾ/ [hæ:] (蠅)

/gæ/ : /migæɾta/ [migæ:ta] (磨いた)

/kæ/ : /cɸikæɾ/ [ɸikæ:] (近い)

/zæ/ : /zæɾgo/ [zæ:go] (ざいご <田舎>)

/sæ/ : /sæɾta/ [sæ:ta] (裂いた)

/ɾæ/ : /kiræɾna/ [kiræ:na] (嫌いな)

/næ/ : /hanæɾ/ [hanæ:] (はなへ <先へ>)

/dæ/ : /sɸidæɾni/ [ɸidæ:ni] (次第に)

/tæ/ : /'itæɾ/ [itæ:] (痛い)

/mæ/ : /mæɾkara/ [mæ:kara] (前から)

/bæ/ : /'ambæɾ/ [ambæ:] (塩梅 <くあい>)

/pæ/ : /haqæɾ/ [happæ:] (八杯)

この他には連母音 ui の融合現象がかかわるもの、名詞と助詞の融合にかかわるものが認められるが個別的原因のため、以下でそれぞれ述べることにする。

6.1. /h/ [h] ~ [ç]

/h/ は東京方言と同じく、音環境にしたがって [h] [ç] として実現される。/o, a, e/ に前接する場合は声門音 [h], /i/ に前接する場合および幼音に該当する音は硬口蓋摩擦音 [ç] である。なお粗雑な発音では /sɸji/ と /hi/ が混同する場合がある。たとえば [so:çite] と [so:ɸite] (そうして), [ɸitaku] と [çitaku] (支度) など。

6.2. /' /

当方言においては /' / に該当するようにはっきりした子音的要素が音声的には認められないが母音や半母音の発音に際してその前にあらわれる gradual beginning がこれに該当するものと解釈される。次のとおりである。

/'a'o/ (背) /'i'e/ (家)

6.3. /g/ [g]

ガ行子音はすべて有声破裂音の [g] であり鼻音の [ŋ] はない。「曲げる」は [mageru] であり、「釘」は [kugi] (釘) である。母音間では摩擦音化し、ゆるんだ感じの [ɣ] となったり、脱落したりする現象もみられる。たとえば次の通り。

[gomuɾutsu], [gomu:tsu] (ゴム靴)

6.4. /k/ [k]

カ行子音は東京語同様、常に無声破裂音の [k] である。概略軟口蓋で調音されるが [i] や [j] の前では硬口蓋がわで長音される。語頭では弱い気音を伴うことがある。

6.5. /z/ [dz] /s/ [s]

ザ行音 /z/ の具体音声は概略摩擦音の [dz] である。摩擦的傾向は語頭で顕著であるが、語中語尾では弱い。たとえば, [dzafiki] (座敷), [ci'za] (膝) のように。ただし本稿では概略的に [dz] で代表させて記述する。

東京語においては /i/ に前接する /z/ は口蓋化を示すが、これも /z/ として認められる。ところが当方言においては次のように [dzi] が認められるため、口蓋化音 [dʒi] は /zji/ と解釈される。

/zi/ : /mazir/ [madzi:] (まづい)

/zji/ : /zjirsama/ [dʒi:sama] (爺さま)
[dzi] が生じるのは /z/ と連母音 /ui/ が結びつくとき及び末尾拍が /zu/ の名詞と助詞のニが承接するときである。連母音の融合現象、名詞と助詞の融合現象において [ui] [ue] は [i:] となるがこの [i:] は前の [dz] を口蓋化できないのである。

なお長門市内の仙崎地区についてはザ行音のダ行音化が著しいことが従来指摘されてきている(前川1963)が、現在はそれほど顕著ではない。この現象は、現在の渋木地区ではわずかに次のような例にみられるだけである。

(座布団は [dzabuton] であり, [dabuton] とはならない。)

[dʒidæ:kagi] (自在鍵) [ko:do:bafi] (こうぞ箸)

[idarʊ] (いざる) [oradatta] (居なかった)

[ʃindo:] (心臓)

サ行音 /s/ は常に摩擦音 [s] である。サ行もザ行と同様、後接する連母音 ui の融合現象、末尾拍が /su/ の名詞と助詞ニの融合現象によって次のように [si] が認められる。

[jasi:] (安い) [usi:] (薄い)

[kosi:] (こすい <利口な, 狡猾な>)

[aburan kasi:] (油の粕に)

この [si] は [ʃi] と次のように音韻的な対立を示す。したがってこれもザ行と平行的に [si] が /si/ と解釈され、[i] が /sji/ と解釈される。

[usi:] (薄い) : [ufi:] (牛に)

6.6. /c/ [ts]

/c/ は破擦音 [ts] である。これもサ行ザ行同様、後接する連母音 ui の融合現象によって [tsi] が認められ、[tʃi] が /cʃi/ と解釈され、[tsi] が /ci/ として解釈される。(2.1.3参照) また、/c/ は /i/ の外 /e, a, o, u/ の母音と結びつくが、/ce/, /ca/, /co/ の語例は多くはない。また、/æ/ と結びついた /cæ/ [tsæ] の拍は見出せない。/ce/, /ca/, /co/ の語例は次の通り。

/ce/ : [koitse:] (こいつへ) [kutse:] (靴へ)

/co/ : [koitso:] (こいつを)

/ca/ : [koitsa:] (こいつは) [matsa:] (松は)

[natsa:] (夏は)

6.7. /r/ [r] ~ [r]

ラ行子音 /r/ は一般に弾き音 [r] であるが、女性にはふるえ音 [r̥] も観察される。本稿では簡略的に [r] で代表させて記述する。当方言では r の脱落が比較的によく観察される。たとえば、受身可能の助動詞レルの使用に於

いて [mitʃu: kikæ:ta] (道を聞かれた) [joræ:rja: jottekuresan] (寄られるなら寄ってよ) のような連母音の融合にかかわった [r] 音の脱落が観察され、また [soa:] (<[sora:]>) (それは), [amegaʃurkara] (<[ammega ʃurukara]>) (雨が降るから) のような脱落も観察される。

6.8. /t/ /d/

タ行子音 /d/, タ行子音 /t/ とともに歯茎破裂音である。共通に母音 /e, æ, a, o/ と結びつき、/i, u/ とは結びつかない。また、東京語にない拍として、それぞれ /dja/ /djo/ /tja/ /tjo/ を構成する。これはいずれも名詞と助詞の融合に際して観察され、また /djo/ /tjo/ は動詞の志向推量形に際しても観察される。例としては次のようなものがある。

/dja/ : [sodja:] (袖は), [udja:] (腕は)

/djo/ : [sodjo:] (袖を), [udjo:] (腕を)

[djo:] (出よう)

/tja/ : [tja:] (手は), [tatja:] (縦は)

/tjo/ : [tjo:] (手を), [tatjo:] (縦を)

[sutjo:] (捨てよう)

6.9. /n/ [n]

ナ行子音 /n/ は、東京語と同じく [n] である。/i, e, æ, a, o, u/ の各母音と結びつくが、/i/ の前で特に口蓋化が著しい。また、/n/ 子音が用いられる格助詞ニ、ノは後にも述べるように母音が脱落して発音化する現象が観察される。

/koton naran/ [koton naraŋ] (ことんならん <仕事などがうまくできない, 無駄である>)

/ucjin zjircjan/ [utʃin dzi:tʃan] (うちの爺ちゃん)

6.10. /m/ [m] /b/ [b]

マ行子音 /m/ とバ行子音 /b/ は東京語と同じ [m] [b] である。[m] と [b] の交替が次のような例にみられる。

「大分」 [dæ:mun] ~ [dæ:bun]

「寒い」 [sabi:] ~ [sami:]

「眠る」 [neburu] ~ [nemuru]

「煙たい」 [kebutæ:] ~ [kemutæ:]

6.11. /p/ [p]

パ行子音も東京語と同じ [p] である。琉球方言や東海の井川村方言、八丈方言のように語頭にあらわれることは外来語、擬声語・擬態語の類を除いてはない。

/doqpana/ [doppana] (土地の先端のところ)

/sjinpærsuru/ [ʃimpæ:suru] (世話をする)

なお、/pɪnpira/ [pimpira] (御転婆) という語があるが、これも擬態語的なものであるとみることができよう。

7. 拍音楽

7.1. /N/

撥音/N/は東京語と同じくその音環境により [m, n, ŋ, ɲ, ɳ] などの異音として実現される。当方言では、先に/n/で述べた助詞ニ、ノの撥音化現象や [aɲɲi] (あれに) のようなラ行節の撥音化現象が顕著である。若干ではあるが次のような発音の挿入もみられる。

[imma] (今) [komma:] (コマイくちいさい)

[ikaɲɲa: ikeɲɲ] (行かなければいけない)

一方、粗雑な発音では次のように撥音が前の母音を鼻母音化しめずからは長音に転じる現象も観察される。

[mugigohā:] (麦御飯) [nē:dʒu:] (年中)

[ʃinadʒihē:] (支那事変)

7.2. /q/

促音/q/は東京語同様、母音の後、無声子音/k, s, c, t, p/の前に立ち、後接する子音に同化する。

7.3. /R/

長音/R/は母音の直後のみにあらわれる。また、/æ/の後には必ずあらわれる。東京語と比較しては東京語

で促音便、撥音便であるものがウ音便になるものがあることが特徴的である。

[jo:ta] (酔った) [uto:ta] (歌った)

[morota] (もらった) [no:da] (飲んだ)

[to:da] (飛んだ) [jo:da] (呼んだ)

[tato:da] (畳んだ) [naro:da] (並んだ)

[ajurda] (歩んだ)

後者のウ音便はいわゆるバ行マ行の四段動詞に実現するものであるが、これは九州方言に連なる特徴として注目される。このようなウ音便は中世鎌倉から室町にかけて成立したとされるが、大塚光信氏はその当時の抄物・キリシタン文献資料について、バ行マ行の四段動詞における撥音便とウ音便の次のような原則によるはりあい関係を指摘している。(大塚1955)

<A> 語幹末がウ列音なる時———— 撥音便

 語幹末がアエイオ列音なる時——ウ音便

但し、次の二傾向も存し、それは抄物よりキリシタン物において著しい。

<a> 語幹一音節語一特に母音音節である場合はそれぞれの原則よりはずれ撥音便となることもある。

 前項により語幹末ウ列音語でウ音便となるものはほとんど語幹二音節以上の語である。

翻って当方言および九州方言の実態をみると(九州方言学会1966による)、いずれも大きくは上記の原則に沿うものであることが解されるが、両者には微妙な相違も認められる。これを示せば次の通りである。

語幹末尾	音節	動詞語例	渋木	長湯 (大分)	北山 (佐賀)	深海 (熊本)
uC	1	汲む ぬ(伸)ぶ	N N	N N	N —	— N
	2	あす(遊)ぶ 結ぶ 歩む	N, uu N, uu N, uu	— — uu	N, uu N, uu N, uu	u — —
oC	1	呼ぶ 飛ぶ 飲む	N, oo N, oo N, oo	uu uu uu	— N, oo oo	u o u
	2	喜ぶ かごむ	N, oo N, oo	— —	N, oo —	— u
aC	1	噛む 編む	N N	oo —	oo —	oo —
	2	はさむ 並ぶ	N, oo N, oo	— —	oo —	— —

注：N, oo, uu は過去の助動詞「タ」、接続助詞「テ」が接続する場合の動詞の変化部を示す。

資料が少ないため、確定的なことはいえないが、この表からうかがう限りにおいて九州方言が〈a〉の規定にほとんど左右されないのに対し、当方言のそれは語幹末が aC である場合についてはこの規定が効いてくるという差異が存するように見える。この点については今後なお精密に検討する必要がある。

—補説—

・名詞と助詞の融合

当方言では助詞のヲ、ニ、ノ、ヘ、ハが前接名詞とさまざまな融合変化を示し、特殊な拍を生ずることがある。この変化を名詞末尾を -Ci のようにあらわし、融合形を -Cju のようにあらわして整理すると次のようになる。この融合変化は青年層でも顕著である。なお、前項名詞語末が撥音、長音の場合はいずれの助詞においても融合変化は起こらないため、以下ではこの場合については省略する。

(1) ヲ

- ・ -Ci (前接動詞の末尾、以下同様) → -Cjur (融合形、以下同様)

[kakjur:] (柿を), [hafur:] (箸を)

注: -Cjor となる個人もある。県下、瀬戸内沿岸では -Cjor となる方が優勢のようである。

- ・ -Ce → -Cjor
- [hapo:] (羽を), [sapo:] (種を)

- ・ -Ca → -Car
- [hana:] (鼻を), [suna:] (砂を)

- ・ -Co → -Cor
- [to:] (戸を), [tao:] (峠を)

- ・ -Cu → -Cu
- [sur:] (酢を), [midzuz:] (水を)

(2) ニ

- ・ -Ci → -Ci, -Cin
- [mitfi: inega otfitforu] (道に稲が落ちている)

[mæ:çiz amega furu] (毎日雨が降る)

[umia otjiru] (海に落ちる)

- ・ -Ce → -Ce, -Cen
- [hane: mjo: tjikadzukeru] (羽に目を近づける)

[aten naran] (あてにならない)

- ・ -Ca → -Cær, -Can
- [nakæ:] (中に), [karan naru] (空になる)

- ・ -Co → -Cer, -Can
- [node:] (喉に), [jokon naru] (横になる)

- ・ -Cu → -Cir, -Can
- [judzi:] (柚に), [midzun naru] (水になる)

(3) ノ

この融合変化は他の融合変化ほど一般的ではなく、このような規則による変化例はむしろ限られているが、あえてこれを示すと次のようになる。

- ・ -Ci → -Cin
- [utʃin dʒi:tʃan] (うちの爺ちゃん)
- [wataʃin ta] (私の田)
- ・ -Ce → -Cen
- [ien naka] (家の中), [men naka] (目の中)
- ・ -Ca → -Can
- [tan naka] (田の中), [kawan naka] (川の中)
- ・ -Co → -Con
- [kaon naka] (顔の中)
- ・ -Cu → -Cun
- [midzun naka] (水の中)

(4) ヘ

- ・ -Ci → -Cir
- [hafji:] (端へ), [migi:] (右へ)
- ・ -Ce → -Cer
- [sore:] (それへ), [hatake:] (畑へ)
- ・ -Ca → -Cær
- [tæ:] (田へ), [iwæ:] (岩へ)
- ・ -Co → -Cer, (-CøR)
- [sote:] (外へ), [taø:] (峠へ)
- ・ -Cu → -Cir
- [midzi:] (水へ), [usi:] (白へ)

(5) ハ

- ・ -Ci → -Cjar
- [hanafa:] (話は), [torja:] (鳥は)
- ・ -Ce → -Cjar
- [mja:] (目は), [tja:] (手は), [sakja:] (酒は)
- ・ -Ca → -Car
- [kuwa:] (桑は), [ima:] (今は)
- ・ -Co → -Car
- [sota:] (外は), [konda:] (今度は)
- ・ -Cu → -Car
- [monka:] (文句は), [fuka:] (服は)

8. おわりに

以上、長門方言の音韻を日常生活場面ということ意識しつつ記述した。その顕著な特色としては各種連母音の融合わけても ai, ae 連母音の融合、動詞の仮定形にみられる /CSSV/ の拍構造、名詞と助詞の融合化現象、さらに ui 連母音の融合、名詞と助詞の融合によって生じた /i/ の前の s, z 子音の非口蓋化をあげるこ

とができる。このうち、連母音の融合、名詞と助詞の融合は従来の記述から中国諸方言に連なる特徴として認めることができる。また、s, z, c子音の非口蓋化は従来の中国諸方言の記述においてとりたてて述べられることがなかったため、比較が難しいが、例えば岡山方言においても次のような談話資料が報告されており、これも中国諸方言への連なりが推測される。

アツイーテ アツイーテ ドーモ コンカギリ
 暑くて 暑くて どうも とても
 アツイーテ
 暑いから

/CSSV/の拍構造についていえば、これも、[kakja:](書けば)のような仮定形が中国方言に広くみられることを考えれば、同様の拍構造が中国方言に存在することも推測されるが、管見の限りにおいて、その裏づけとなる記述資料がないため、この点については今後の調査を待つ必要がある。

一方ではバ行、マ行動詞のウ音便化にみられるような形態音韻論のレベルにおける九州方言的要素の存在も無視することはできないが、この要素は中国方言的要素に比べると比重の小さいものである。[jo: hafiri kiran] (走ることができない)のような可能表現、[ki: sarengotoarudæ:] (どうやら来ないようだぞ)のような推量表現、[jukiga futtoru] (雪が降っている)のようなアスペクト(已然態)表現、さらには[sobiku] (〈裾を〉引きずる)、[airu] (〈雨が〉落ちる)のような語彙にも九州方言的要素が目立つ当域であるが、音韻的側面においては、これがやや薄れ、より中国方言的特色が濃厚であるということができよう。ただし、こうした近隣諸方言との対比は今後より精密に行なう必要がある。

ところで従来、記述の対象という点について、場面ということにはあまり積極的な注意が向けられてこなかった。本稿では狭義で日常自然な発話場面という記述対象のレベルを考えたが、これも広義に解釈すれば「暗一襲」の対立が認められ、この間には縦横に様々なレベルの場面があり得、そこには方言と共通語のさまざまな程度のはりあいがある。また、老年層から若年層への変化という視点に立てば、老年層の日常生活場面において安定的な[tsi], [dzi], [si], [wja], [fi], [fa]のような拍も中若年層では生活場面そのものの変化とともに急速に生存範囲を狭め衰退しつつあるように観察される。このような生活場面とのかかわりについての共時的、通時的な掘り下げも今後の課題として残される。

〈注1〉調査においては次の諸氏に話者としてご協力をいただいた。

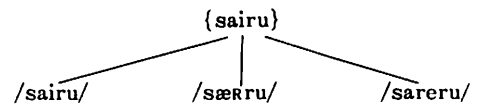
久保田末男氏(明治44年生)
 幸池リヨ子氏(大正2年生)
 藤田ユキヨ氏(大正5年生)
 村田 庄一氏(大正8年生)
 植杉 文子氏(大正8年生)
 坂辻 秀一氏(大正8年生)
 村田 節子氏(大正13年生)

〈注2〉県下各地でai連母音の同化の程度の違うことは、日本放送協会編1967中の都濃郡都濃町と美祿郡秋芳町の談話資料の対照からもうかがうことができる。(都濃町では同化の程度はai, aëくらいが一般的であるが、秋芳町ではæが一般的である。)

〈注3〉たとえば[tæ:gatæ:](有り難い)はあらたまった場面で高い待遇価を有する諸要素と組みあわさって用いられても[otæ:gato:godzæ:mafita](有り難うございました)のように相互同化した形しかあらわれない。

〈注4〉広戸1965参照。

〈注5〉/æ/を認めることにより、「日本語研究4」の「山口県長門市旧深川地区に置ける待遇表現の諸相」のp.63に示した図は次のように変更しなければならない。



〈注6〉鏡味1976は岡山方言にも同様な音声が開かれることを指摘している。

〈注7〉糸井1976によれば、大分方言ではuiの他oiも[i:]と融合変化し、この[i:]の前の子音には一般に口蓋化がみられないという。

〈注8〉日本放送出版協会編1967, p.121, 岡山県真庭郡勝山町神代。ただし、アツイーテの音声表記は[atɥite]となっている。

参考文献

- 大塚光信1955 「バ四・マ四の音便形」(『国語・国文247』)
 馬瀬良雄1961 「八丈島方言の音韻分析」(『国語学43』)
 前川秀雄1963 「方言学講座3」中の「山口」
 日本放送協会編1967 「NHK録音文字化資料5」

九州方言学会編1969 『九州方言の基礎的研究』
 糸井寛一1976 「豊日・肥筑方言」(『新・日本語講座
 3』)
 鏡味明克1976 「中国方言」(『新・日本語講座3』)
 藤原与一1977 『昭和日本語の方言4』三弥井書房
 神部宏泰1978 『隠岐方言の研究』風間書房
 平山輝男編1979 『方言基礎語彙の研究序説』
 岡野信子1980 「くらしのことば」(『長門市史・民俗

篇』)
 藤田勝良1981 「山口県長門市旧深川地区に置ける待
 遇表現の諸相」(『日本語研究4』)
 中川健二郎1982 「山口県の方言」(『講座方言学8』国
 書刊行会)
 中条修編1982 『静岡方言の研究』吉見書店

(東京都立大学大学院学生)

ユキの意味と方言形式

平澤 洋 一

1. はじめに

日本人にとっての「雪」は、『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』『新古今和歌集』『金槐和歌集』『山家集』『義経記』『笈日記』をはじめ実に多くの作品で扱われてきた(『ことばとくらし』8号、『意味の世界と日本語』で詳説)が、雪国の「雪」を素材にしたものは驚くほど少ない。また、描出されても「雪降れば木々のこのはも春ならでをしなべ梅の花ぞ咲きける」(『和泉式部日記』)や「いざ行む雪見にころふ所まで」(『笈の小文』)のような評価度の高い描かれ方は、雪国の人々からはほとんどされなかった。なぜであろうか。

雪国の「雪」は、あまりにも生活に密着し生活に重くのしかかってくる「雪」であり、冬の日々は「雪」との闘いの明け暮れであったからであろう。程度の差こそあれ、「越後のごとく年毎に幾大の雪を視ば、何の楽しき事かあらん。雪の為に力を尽し財を費し千変変若する」(『北越雪譜』上之巻)といった受け止め方は、今でも見られる。それだけに、「雪」に関する方言語彙は、切実な評価・感情的意味をもつことが多い。

このような「雪」は、どのような意味の広がりや表現の形式をもつのか。ここでは豪雪地の一つ新潟県小千谷市大字蘇生のユキ語彙(老年層)を中心に、ユキと生活と方言との関わりをみていくことにする。

この地方にユキのある期間は、年によって違いはあるが、おおむね次の4期に分かれる。

- i 初雪・根雪初期=11月中旬~12月中旬ごろ。ユキが水っばい。
- ii 根雪中期=12月下旬~3月上旬ごろ。晴間なく降ることが多い。
 - (i) 12月下旬~1月上旬ごろはワタユキ(綿雪)が多い。

(ii) 1月中旬~2月初旬ごろは最も寒い。コナユキ(粉雪)がふつう。

(iii) 2月中旬~3月上旬ごろはよくボタンユキ(牡丹雪)が降る。

iii 根雪晩期=3月中旬~彼岸ごろ。晴間が多くなる。

iv 雪解け期=彼岸過ぎ。降ってもハルユキ程度。方言生活の場でユキの細かな意味領域を表現するのは、語とは限らない。句のこともあれば、特に定まった方言形式をもたないものもある。形態だけを基準にしたのでは「意味」の全体像がつかめないこともある。そこで、意味的類似性と対立性を重くみて意味領域を分けていくと次の類型を得る。

- a 初雪を表すもの
- b 降雪を表すもの
- c 積雪を表すもの
- d 雪質・雪状を表すもの
- e 雪害・闘雪を表すもの
- f 民俗を表すもの

2. 初雪

この地方のユキに対する最大の関心事は、いつ初雪が降るか、いつ本格的な雪が降るか、大雪になるか否か、いつ消えるかである。初雪が例年より遅かったり、冬場の積雪が少ないといったうれしい年には、コトシワマラ フラネアレ イーネ(今年はまだ降らなくていいねえ)やコトシワ チットレ アリガテァネー(今年は雪が少なくてありがたいねえ)が挨拶ことばになったりする。

初雪の前にはユキガンナリサマ(雪雷様)が聞こえる。例年、11月に入るとユキがいつ降ってもおかしく